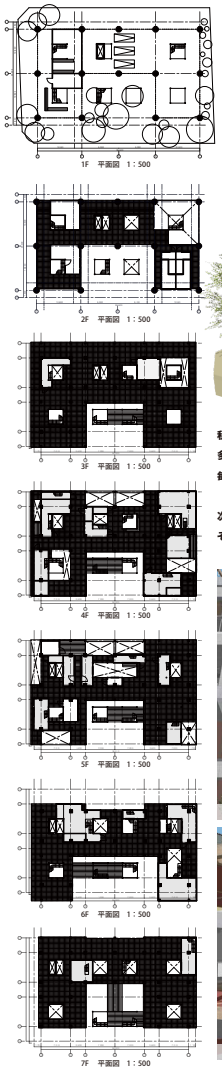
Who is NEXT?



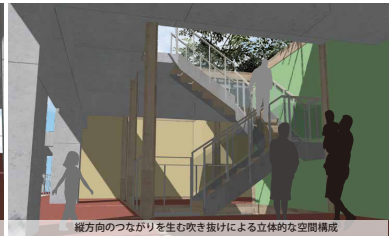
私たちは「NEXT の NEXT」として
多くの人が訪れ、入れ替わり、変化し続ける住宅
毎日、新しい出会いがあり、新しい実験、可能性が生み出される住宅

次は、どんな人が住むのか、どんな出会い、発見があるのか
そんなワクワクするような次世代の実験集合住宅「Who is NEXT?」を提案します

木造グリッドによって住民と地域の人々の関係を生み出すバッファゾーン

グランドレベルから「Who is NEXT?」を眺める

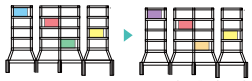
共用部分としての木造グリッドと住戸の関係


縦方向のつながりを生む吹き抜けによる立体的な空間構成

01 CONCEPT 多様化する居住形態のための実験

居住形態は多様化し、それに伴い、住戸の間取りだけではなく住戸そのもののスケールや利用の仕方、外部の溢れ出し外作り込み、住民の居住空間に対する働きかけなど住戸を取り巻く環境は大きな変化の渦中にある。そんなか、今 NEXT21 という居住実験施設に求められる未来のカタチ「NEXT の NEXT」は より幅のある住まい方を選択でき、より多様な人々のそれらの住戸に対する実証実験を行うことである。

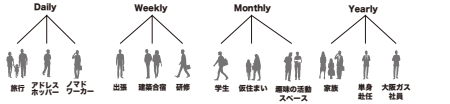
02 BACKGROUND 変化し続ける実験集合住宅



NEXT21 では日々、スケルトンを元としてインフィル部分の住戸がつくり変わっていき新たな実験が行われている。特殊なケースを想定した実験も多く行われており、スケルトンを活かした可変的な空間の設計がなされ、日々住戸の新陳代謝がなされている。

03 TARGET 利用者像

居住形態が多様化するなかで数日で住む場所を変えていくアドレスホッパーから何十年も同じ家に住んでいる人まで住むことに対する時間軸は非常に幅があるものとなっている。そこで、グリッドのモジュールによって様々な形態、用途を持つ空間を設計し、幅を持った利用を可能とし、それらの空間を滞在期間で分類し、可変的かつ多様な人々の利用が予想される実験用住戸を提案する。

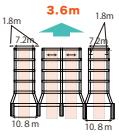


利用例（実験例）

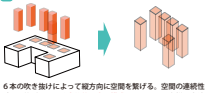
04 PROGRAM 6 つのプログラム

モジュールの再構築

元々 NEXT21 では 1、2 階の共用部は商用にも転用できるようスパンが 1 0．8 m となっており 1 階以上が居住用として 7．2 m となっている。本提案では、更なる利用の可能性の拡大のためこれらのスケールから ５一段階スケールダウンした 3．6 m の規格を用いる。

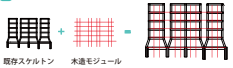


吹き抜けで繋がる



6 本の吹き抜けによって縦方向に空間を繋げる。空間の連続性が平面的だけでなく立体的な空間構成となり、より多様な交流の場や生活環境が生み出される。

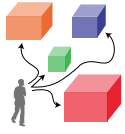
スケルトンのスケールダウン



スケルトンに木造のモジュールを組み合わせることで、住民が手を加えやすいスケールとなる。また、空間の構成もより多種多様となり、様々な形態の住戸や共用空間が生み出される。

多様な室のスケール

スケルトンと木造のモジュールに合わせ多様なスケールの室が形成される。住民や利用者が必要に応じて居室を選択することができ、多種な実験を行うことができると同時に今までよりも多くの人（大阪ガス社員だけでなく一般の多くの方）が実際に NEXT21 を訪れ、体験し、暮らすことができるようになる。



つなぐグリッド

庭の部分にも木材のグリッドを配置する。地域の人々や住人が気軽に過ごせる共用部として設計した。6 本の吹き抜けと連動して外部から NEXT21 内での動線を連動させ、街から NEXT21 へと緩やかに空間を繋げていく。

利用形態の提案

一日滞在のホテルや貸しスペースのような使い方から、何年も居住するという使い方まで幅広い使い方に対応した設計。形態のみではなく使い方についても合わせて実験することが可能となり、さらには、小さなスペースほど可変性が高く、空間の新陳代謝を促進する。

05 DIAGRAM 木のスケルトンと多様な室の形成

06 SECTION 多様な人々、多様な出会い

既存のスケルトンに木のグリッドを挿入することによって、多様な空間が生み出されている。また、住人の手によって写真が飾られたり、洗濯物も干す場になったりと様々な暮らしの作り込みが行われる。
吹き抜けも同様に住人の作り込みの場となるのと同時に NEXT21 全体の空間を立体的にもつなぎ、より多くの人が訪れやすく関わることのできる場を提供している。

断面パース 1：150

N00199

Who is NEXT?

高木 柊（名城大学大学院）

藤村 悠生（名城大学大学院）

柘植 勇介（名城大学）